

### 3. 第 100 回記念大会

資料（ペーパー・レジュメ・参加記）

北海道中央ユーラシア研究会 第 100 回記念大会 第 1 部 報告 1

ジョチ・ウルス史研究の現状と課題

川口 琢司

(藤女子大学文学部兼任講師)

日 時 : 2012 年 7 月 14 日 (土) 13:30-14:20

場 所 : 北海道大学スラブ研究センター4 階大会議室

司会者 : 宇山智彦 (北海道大学スラブ研究センター教授)

参加者 : 25 名

はじめに

本報告は、ジョチ・ウルスの歴史をあきらかにする史料として近年注目されている『チンギズ・ナーマ』という文献について、研究の現状を紹介し、今後の研究の可能性を探ることを主たる目的とする。ジョチ・ウルスとは、金帳とも呼ばれ、一般的には 13 世紀から 16 世紀初頭まで、主として中央ユーラシア西部のキプチャク草原で興亡したモンゴル・テュルク系の政権を言う<sup>1</sup>。

1. ジョチ・ウルス史研究の限界

近年のジョチ・ウルス史研究は史料と研究手法の両方において大きな問題を抱えているように思われる。

まず、史料について言うならば、ジョチ・ウルス史を研究するためのもっとも重要な史料はジョチ・ウルス内部で書かれた同時代史料である。しかし、現存するものは少なく、そのほとんどが文書、貨幣、韻文文献である。なお、これも一種の文書とみなすことができるが、ジョチ・ウルスからモスクワ大公へ送られた複数のテュルク語文書のロシア語訳がロシア語年代記に含まれていることが古くから知られている。残念ながら、その利用はいまだ不十分と言わざるをえず、今後の多角的な研究が期待される<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> ただし、15 世紀から 18 世紀まで、ジョチ・ウルスの中からいわゆるクリミア・ハン国やカザン・ハン国などの独立政権が出現して興亡した時期を「(前期)金帳」と区別して「後期金帳 (the Later Golden Horde)」と呼ぶ場合がある (Uli Schamiloğlu, “The *Umdet il-ahbar* and the Turkic Narrative Sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde,” in Hasan B. Paksoy, ed., *Central Asian Monuments* (Istanbul: Isis Press, 1992), pp. 81-93)。この時代区分に従えば、本報告が対象とするのは「(前期)金帳」ということになる。

<sup>2</sup> これを利用した研究として、川口琢司、長峰博之「15 世紀ジョチ・ウルスとモスクワの相互認識：ロシア語訳テュルク語文書を中心に」小澤実編『北西ユーラシア歴史空間の再構築 (仮題)』北

一方、ジョチ・ウルスの外で書かれた同時代史料としては、イル・ハン朝やティムール帝国で書かれたペルシア語史料、マムルーク朝で書かれたアラビア語史料、ルーシ諸国で書かれたロシア語史料などがある。これらは長年多くの研究者により利用されてきており、その意味でジョチ・ウルス史研究のための中心的な史料群であるといえる。ところが、これらは外国で書かれたものだけに、記述の信頼性に欠ける場合も少なくなく、たとえば、ティムール帝国で編纂された史料の一つである『ムイーン史選』は、ジョチ・ウルスに関する記述に多くの誤りがあることが判明し、多くの研究者を惑わせ誤らせてきた史料として知られる。

したがって、上記の諸史料を使ってジョチ・ウルス史を研究すること自体、もはや限界にきているという印象は拭えない。

つぎに、研究手法についてであるが、本格的なジョチ・ウルス史研究は 19 世紀のオーストリアのハンマー・プルクシュタールに始まって以来、ドイツのシュプラー、ソ連のグレコフ、ヤクボフスキー、サファルガリエフ、フョードロフ・ダヴィドフなどすぐれた研究者を輩出し、ジョチ・ウルス史全体を俯瞰するような研究が相次いで行われてきた。しかし、近年はアメリカのオールセン、ロシアのコスチュコフ、トレパヴロフ、ザイツェフらによりジョチ・ウルスを構成した諸政権の個別研究がさかんに行われ、すぐれた成果が生み出されている。個別研究の重要性は言うまでもないが、その分、ジョチ・ウルスの全体像を見据えた研究が現われにくくなっていることも事実である。

以上のような史料と研究の現状を鑑み、報告者はいくつかの問題に注目してジョチ・ウルス史の全体像を再構築するための手がかりをえたいと考えている。そして、それらの問題を考察する上で重要な示唆をあたえると思われるのが、本報告で取り上げる『チンギズ・ナーマ』という文献なのである<sup>3</sup>。

## 2. 『チンギズ・ナーマ』とタシュケント写本

『チンギズ・ナーマ』は、16 世紀半ばにホラズム地方のヒヴァ・ハン国に仕えたウテミシュ・ハーギーにより編纂されたアラビア文字チャガタイ語の歴史書である。16 世紀半ばではあるが、ホラズム地方という、ジョチ・ウルスの領域内で書かれた点が注目される。内容的には、主として 13 世紀から 15 世紀半ばまでのジョチ・ウルス史を活写しており、他国の諸史料に見られない情報を含み、ジョチ・ウルス史研究の限界を克服する可能性を秘める。

---

海道大学出版会（近刊）がある。

<sup>3</sup> 現在、報告者と長峰博之はこの文献をも用いてジョチ・ウルスの国制に関する共同研究を進行中である。本報告にはこの共同研究の成果の一部も含まれる。

現存する写本としては2種類が知られており、一つはタシュケントのウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所に所蔵される写本（以下、タシュケント写本と呼ぶ）、もう一つはヴォルガ・ウラル地方の著名なウラマーであったリザエッディン（またはファフレッディンとも呼ばれる）*Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn* (1858–1936)<sup>4</sup>が所有した写本である（以下、リザエッディン写本と呼ぶ）。

このうち、タシュケント写本はロシア・ソ連のバルトリドが発見した全24葉の不完全な写本で、筆写年代は不明である。冒頭に『チンギズ・ナーマ』の書名があることから、一般に作品の書名とみなされてきた。書写の状態は良好ではなく、途中に破損による欠落も見られる。最後はトクタミシュ（在位1378/79–95）の物語の途中で唐突に終わっている。

タシュケント写本の全容を初めて紹介したのはソ連のユーゼンであり、ファクシミリを提供するとともに、キリル文字転写、ロシア語訳を行った<sup>5</sup>。続いて、報告者と長峰博之は同写本のアラビア文字テキスト、ローマ字転写、邦訳を<sup>6</sup>、トルコのカマロフはローマ字転写とトルコ語訳を公表した<sup>7</sup>。バルトリドやデウィースは同写本の部分的なテキストと翻訳を公表している<sup>8</sup>。さらに、ウズベキスタンではウズベク語訳が出され、カザフスタンやトルコでは言語学的研究も公刊されている。

タシュケント写本の内容を簡単に紹介すると、まず、冒頭の序文に相当する部分では編者の簡単な経歴と編纂の事情が語られる。ついで、「誰々の物語（*dāstān*）の始まり」という小見出しで始まる9つの口承的な物語が語られる。最初の物語は小見出しにチンギス・ハンの名が見えるが、実際にはジョチ・ハンを含む子孫たちの短い話で、そもそもこの写本にはチンギス・ハンに関する物語は見えない。最後のベルディ・ベグ・ハンの物語のあと、その死後の記述として、いくつかの重要な物語が語られ、前述のように、トクタミシ

<sup>4</sup> リザエッディンの経歴については、İsmail Türkoğlu, *Rusya Türkleri Arasındaki Yenileşme Hareketinin Öncülerinden Rızaeddin Fahreddin (1858–1936)* (İstanbul: Ötüken, 2000); 小松久男「ファフレッディン」小松久男他編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、446–447頁；磯貝真澄「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育」『西南アジア研究』第76号、2012年、4–6頁を参照のこと。

<sup>5</sup> *Утемиш-хаджи Чингиз-наме. Факсимиле, перевод, транскрипция, текстологические примечания, исследование* В. П. Юдина. Подготовила к изданию Ю. Г. Баранова. Комментарии и указатели М. Х. Абусеитовой. Алма-Ата, 1992. ただし、本書が刊行されたのはユーゼンの死後のことである。

<sup>6</sup> *Ötämiş Hāji, Çingiz-nāma*, Introduction, Annotated Translation, Transcription and Critical Text by KAWAGUCHI Takushi, NAGAMINE Hiroyuki, Supervision by SUGAHARA Mutsumi, *Studia Culturae Islamicae*, No. 94 (Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2008). なお、*Кавагучи Т., Нагамине Х.* Некоторые новые данные о «Чингиз-наме» Утемиша-хаджи : в системе историографии в Дашт-и Кипчак // *Золотоордынская цивилизация*. 2010. Вып. 3. С. 44–52. は上記の書の解題を加筆・訂正したものである。

<sup>7</sup> *Ötemiş Hacı, Çengiz-nâme, yayına haz. İlyas Kamalov* (Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2009).

<sup>8</sup> *Бартольд В. В.* Отчет о командировке в Туркестан // *Сочинения*. Т. VIII. М., 1973. С. 165–169; Devin DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition* (Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 1994), pp. 533–565.

ユの物語の途中で終わる。

### 3. リザエッディン写本の「発見」

他方、『チンギズ・ナーマ』のもう一つの写本であるリザエッディン写本は、意外にも、現在、トルコにある。バシキール人の民族運動の指導者として名高いトガン Ahmet Zeki Velidi Togan (1890–1970) は、オレンブルグでタタール語の雑誌『シューラー』(1908–17)の主筆であったリザエッディンからタシュケント写本よりも「比べものにならないほど完全な」写本(リザエッディン写本のこと)を入手したという<sup>9</sup>。これに対し、タタールスタンのミルガレエフ(ミルガリエフ)は、リザエッディンがトガンに貸した写本が返ってこない友人に不満をもらしていたという情報をもとに、トガンはリザエッディンから借用した写本を返さずにトルコに亡命し、自分の数名の弟子以外には誰にもこの写本を貸与しなかったと指摘している<sup>10</sup>。晩年、トガンはイスタンブル大学教授として研究生活に専念したが<sup>11</sup>、かれの弟子で、ジョチ・ウルス史を研究していたカファルは、リザエッディン写本をテーマとする博士論文を作成し、ジョチ・ウルス史についてまとめた著書の中でもこの写本を利用した<sup>12</sup>。現在、この写本はトガンの子孫が所有している。

近年、カファルは1965年にイスタンブル大学に提出した博士論文を約半世紀を経て公開した<sup>13</sup>。本書が注目されるのは、世界で初めてリザエッディン写本のローマ字転写を公表したからである。ただし、校訂テキストやファクシミリは含まれておらず、ミルガレエフによれば、転写の誤りも散見されるという。ミルガレエフはリザエッディン写本の写しを独自に入手し、写本のテキストの公開を準備中である。また、同氏はこの写本の流転の経緯や写本に関するいくつかの重要な情報をあきらかにしている<sup>14</sup>。リザエッディン写本のテキストの全容があきらかになれば、ジョチ・ウルス史研究はおおいに進展するものと思われる。

カファルやミルガレエフの伝える情報によれば、リザエッディン写本は全76葉で、わず

<sup>9</sup> *Валидовъ А. -3. Восточныя рукописи въ Ферганской области // Записки Восточного отделения (Имп.) Русского археологического общества. 1915. Т. 22. Ч. 2. С. 320.* なお、山内昌之「トガン」小松久男他編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、381–382頁も参照。

<sup>10</sup> *Миргалеев И. М. «Чингиз-наме» Утемиша-хаджи: Перспективы изучения // Золотоордынская цивилизация. 2011. Вып. 4. С. 16.*

<sup>11</sup> トガンはリザエッディン写本の刊行を予定していたようだが、実現しなかった(*Zeki Velidi Togan'a Armağan* (İstanbul: Maarif Basımevi, 1950–55), pp. xlvii–xlvi).

<sup>12</sup> Mustafa Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluş ve Yükseliş Devirleri* (İstanbul: Edebiyat Fakültesi Matbaası, 1976).

<sup>13</sup> Mustafa Kafalı, *Ötemiş Hacı'ya göre Cuci Ulusu'nun tarihi, Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü Yayınları, Türk Tarihi Araştırmaları 01* (Ankara: Öncü Basımevi, 2009).

<sup>14</sup> *Миргалеев. «Чингиз-наме» Утемиша-хаджи. С. 14–19.*

かに序文の2葉が欠落しただけのほぼ完全な写本である。トガンがタシュケント写本よりも「比べものにならないほど完全な」写本というのもうなずける。ヒジュラ暦1040（西暦1630/31）年の筆写で、堅表紙のない写本の表には『黒史 *Qārā Tavārīkh*』の書名が見られる。しかし、カファルも指摘するように、これはあきらかに後世の誰かの手で書かれており、作品の書名であると速断することはできない。むしろ、後述するように、リザエッディン写本から初めて作品の冒頭に長いチンギス・ハン史があることが判明したが、この事実から作品の書名を『チンギズ・ナーマ』とすることは妥当であるように思われる。

カファルによるローマ字転写に依拠してリザエッディン写本の内容を検討すると、タシュケント写本との異同がかなり激しく、頻繁に語句の位置の相違、異なる単語の使用、語句・文の付加などが見られる。重要なことに、この写本から作品がヒジュラ暦959（西暦1551/52）年の著述であることが判明する。全体は2部からなり、最後の2葉半は写字生が西シベリアのシバン家の系譜について書き加えたものであるとされる。第1部には冒頭にタシュケント写本にはない、長いチンギス・ハン史の記述が見られる。そのあと、タシュケント写本と同じ内容の物語が続く。第2部は14世紀末から15世紀半ばまでのジョチ・ウルスの諸勢力の活動について詳述しており、きわめて興味深い内容が含まれている。

#### 4. 『チンギズ・ナーマ』の可能性

タシュケント写本には記年がまったく見られず、ダスタンと呼ばれる口承的な物語が中心を占めているため、ユーゼンは『チンギズ・ナーマ』の口承史料としての性格を強調した。しかしながら、『チンギズ・ナーマ』は実際には口承史料と記述史料の両方の性格を併せもつ<sup>15</sup>。ウテミシュ・ハーギーに貴重な情報をあたえた可能性があるインフォーマントとしては、ヒヴァ・ハン国の創始者であるイルバルス・ハン、アストラハン・ハン国の君主であるシャイフ・アフマド・ハン、同国の有力者であるハーギー・ニヤーズ、同国の君主アブドゥルカリーム・ハンに仕えたヒタイ部族の有力者ババ・アリーなどが挙げられる<sup>16</sup>。これらはいずれもジョチ・ウルスの継承政権の中核または周辺にいた人物であり、その意味でウテミシュ・ハーギーがえた情報の信頼性は高いといえることができる。

また、ウテミシュ・ハーギーが利用した記述史料としては、著者不明の「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」あるいは「ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊」、ティムール帝国の宮廷史家シャラフッディーン・アリー・ヤズディーの『勝利の書』の名前が見られる。さらに、カファルは、書名こそ見られないが、イル・ハン朝の宰相ラシード

<sup>15</sup> *Ötamiş Hâjî, Çingiz-nâma*, pp. xx-xxiii.

<sup>16</sup> リザエッディン写本からは、著者がヒタイ部族のサイド・アリー、キプチャク部族のアヤズなる人物からも情報をえたことがわかる (*Kafalı, Ötamiş Hacı'ya göre Cuci Ulusu'nun tarihi*, pp. 33-34)。

ウッディーンの『集史』や『モンゴル秘史』も利用されたと指摘するが<sup>17</sup>、これについては慎重な検討を必要としよう。また、上述のイルバルス・ハン、シャイフ・アフマド・ハン、ハージー・ニヤーズ、パバ・アリーはいずれも史書または書物を著した著述家として知られており<sup>18</sup>、ウテミシュ・ハージーがそれらを利用した可能性もじゅうぶんに考えられる。

さて、タシュケント写本とリザエッディン写本から復元された『チンギズ・ナーマ』は一種のモンゴル史であることがわかる。すなわち、序文のあとに長いチンギス・ハン史が置かれ、それにジョチ・ウルス史が接続する。こうした叙述の形式や内容については、17世紀初頭にカシモフで著されたカーディル・アリーの『集史』、17世紀後半にヒヴァ・ハン国君主アブルガズィーにより著された『テュルク系譜』、18世紀半ばにクリミアで著された『諸情報の要諦』<sup>19</sup>などとの比較・検討に値する。

また、『チンギズ・ナーマ』は16世紀半ばのヒヴァ・ハン国に仕えた歴史家がチンギス統原理にもとづいて過去のジョチ・ウルスの歴史をどのように認識していたかをわれわれに示してくれる格好の史料でもある。

では、われわれは今後のジョチ・ウルス史研究のために『チンギズ・ナーマ』のどのような記述に注目することができるのであろうか。とくに、ジョチ・ウルス史のあらたな全体像を描くためには国制に関する考察が欠かせない。これに関連して、『チンギズ・ナーマ』には左右両翼体制やそれをふまえた白帳・青帳・金帳に関する記述も見られる。左右両翼体制はまたウズ・ベグと呼ばれる集団の形成を考えるきっかけをもあたえよう。また、モンゴル帝国の他のウルスとくらべ、ジョチ・ウルスではカラ・キシ、すなわちチンギス家に属さない部族出身者の台頭がしばしばみられるが、これについても『チンギズ・ナーマ』の記述は異彩を放っている。後述するテンギズ・ブガのケースでは、カラ・キシの台頭とジョチ家によるカラ・キシ打倒は左翼ウルスで生じたことから、この一連の事件は左右両翼体制を前提としていたと言うこともできる。その一方で、カラ・キシの台頭を考えなければ、のちのノガイ・オルダの形成などを理解することはできない。

## 5. カラ・キシの台頭

最後に、『チンギズ・ナーマ』がジョチ・ウルス史研究にとって有用である点について<sup>20</sup>、

<sup>17</sup> Kafalı, *Ötemiş Hacı 'ya göre Cuci Ulusu'nun tarihi*, pp. 31–32.

<sup>18</sup> これについては、Ötemiş Hājī, *Čingīz-nāma*, p. xxii, footnote 39 を参照。

<sup>19</sup> この史書については、拙稿「18世紀クリミアのオスマン語史書『諸情報の要諦』における歴史叙述：ペルシア語文献からの影響を中心に」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会、2009年、147–173頁を参照。『諸情報の要諦』は『チンギズ・ナーマ』を典拠の一つとした可能性がきわめて高い。

<sup>20</sup> Ötemiş Hājī, *Čingīz-nāma*, p. xvi.

カラ・キシの台頭を事例に具体的に述べてみよう。

カラ・キシとは、テュルク語で「黒い人」の意味で、チンギス家に属さない諸部族の人々をいう。ジョチ・ウルスではカラ・キシがジョチ家の君主を傀儡化して実権を握るケースがしばしば見られた。たとえば、14世紀後半に活動したママイや14世紀末から15世紀初頭にかけてのエディギュはそのような典型的な人物である。

さて、『チンギズ・ナーマ』には、トクタガ・ハン<sup>21</sup>（在位 1291–1312）からウズ・ベグ・ハン（在位 1313–41）への移行期にジョチ・ウルスの実権を握った人物としてウイグル部族ともいわれるトク・ブガが登場する。さらに、ベルディ・ベグ・ハン（在位 1357–59）の死後にはジョチ・ウルスの実権を掌握しようとしたキヤト部族のテンギズ・ブガが登場する。ここではこの二人のカラ・キシに注目しよう。

『チンギズ・ナーマ』によれば、トク・ブガはトクタガ・ハンの師傅であったが、トクタガの死後に成り上がり、ハンになった。これに対し、トクタガ配下のキヤト部族のイサタイ（またはアスタイとも呼ばれる）とスイジュト部族のアラタイらはトクタガの甥であるウズ・ベグを即位させるため、トク・ブガを殺し、ウズ・ベグをハンに即位させたという<sup>22</sup>。

ウテミシュ・ハーギーはトク・ブガがハンになったと述べているが、チンギス統原理からすれば、カラ・キシがハンになることはありえない。したがって、これが事実であるか否かの判断は慎重に行われるべきであろう。むしろここで注目すべきは、トクタガからウズ・ベグへの移行期にカラ・キシが一時的にせよジョチ・ウルスの実権を奪ったとされる点である。もちろん、これはカラ・キシがハンになったという意味ではない。

これに関連して、イル・ハン朝側の同時代史料であるカーシャーニーの『オルジェイトゥ史』に興味深い記述がある<sup>23</sup>。それによれば、以前からウズ・ベグは配下の將軍たちにイスラーム信仰を強く求めていたため、將軍たちはウズ・ベグに反発していた。ついに反ウズ・ベグ勢力がトクタの息子を擁立してウズ・ベグを殺そうとしたため、ウズ・ベグは逃走したが、大軍を集め、反ウズ・ベグ勢力を打倒してハンに即位したというのである。

『オルジェイトゥ史』が外部史料であることによると思われるが、ウズ・ベグが逃走してからハンに即位するまでの記述がいかにも簡潔である。このため、この一連の物語はウズ・ベグによる政変の内実をじゅうぶんに伝えているとは言いがたい印象を受ける。常識的に言えば、ウズ・ベグがサライから逃走したあと大軍を集めてサライに捲土重来するまでにはそれなりの準備と時間が必要だったと見なければならず、その間にカラ・キシを中心と

<sup>21</sup> 他の史料ではトクタとも呼ばれるハン。

<sup>22</sup> Ötāmiš Hājī, *Čingiz-nāma*, pp. 27–30.

<sup>23</sup> Abū al-Qāsim ‘Abd Allāh b. ‘Alī b. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāyū*, MS., Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3019, 198b–199a.



する反ウズ・ベグ勢力がサライをおさえジョチ・ウルスの実権を掌握した可能性はじゅうぶんにあったものと思われる。

つぎに、テンギズ・ブガのケースを見てみよう。『チンギズ・ナーマ』によれば、この人物はベルディ・ベグ・ハンの死後にジョチ家のカラ・ノガイを擁立してジョチ・ウルスの実権を握ろうとした。これに対し、ジョチ家のボグリ・ホージャ・アフマドがカラ・ノガイを説得すると、カラ・ノガイは改心し、テンギズ・ブガを殺害してハンに即位した。カラ・ノガイ・ハンは3年統治して亡くなり、そのあと、かれの弟トゥグル・テムルがハンになったという<sup>24</sup>。

ジョチ家のバトゥ系統からトカ・テムル系統に権力が移るきっかけとなったこの政変は他の史料には見えない貴重な記述である。ユーチンはこの記述に登場するボグリ・ホージャ・アフマド、カラ・ノガイ、トゥグル・テムルの名前をティムール帝国の系譜史料である『高貴系譜』やシャイバーン朝の系譜史料である『選史・勝利の書』に見出した<sup>25</sup>。さらに、報告者と長峰博之、ハンガリーのヴァーシャーリはティムール帝国史料であるニザームッディーン・シャーミーの『勝利の書』の記述からカラ・ノガイとトゥグル・テムルが相次いでジョチ・ウルスの統治者になったことを確認した<sup>26</sup>。『チンギズ・ナーマ』に見えるテンギズ・ブガ打倒の記述は、バトゥ系統のベルディ・ベグからトカ・テムル系統のカラ・ノガイへの権力の移行が政変という形で行われたこと、そしてそれにカラ・キシが関わっていた可能性を示唆している。また、トカ・テムル系統への権力の移行がこれまで一般に言われてきたオロスの時代（1368/69–78）からではなく、それ以前のカラ・ノガイの時代から始まっていたことを物語っている。

## おわりに

16世紀半ばにジョチ・ウルスの領域で編纂された『チンギズ・ナーマ』の研究は、リザエッディン写本の「発見」によりあらたな段階に入った。ミルガレエフらによる同写本のテキストの一刻も早い公刊が待たれるところである。リザエッディン写本の研究が進めば、15世紀のジョチ・ウルス史を中心に多くの知見があきらかになるものと思われる。

それとともに、報告者は16世紀以降の中央ユーラシア西部、すなわちジョチ・ウルスの領域で著された歴史叙述を体系的にとらえる必要性を感じている。そこには、16世紀以降、さまざまなジョチ・ウルスの後継国家が興亡した。しかし、政治的には分裂していても、

<sup>24</sup> Ötämiš Hāji, *Čingiz-nāma*, pp. 38–41, 44.

<sup>25</sup> Утемиш-хаджи. Чингиз-наме. С. 72–74.

<sup>26</sup> Ötämiš Hāji, *Čingiz-nāma*, p. 37, footnote 87; István Vásáry, “The Beginnings of Coinage in the Blue Horde,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 62, no. 4 (2009), pp. 381–383. シャーミーの『勝利の書』では、カラ・ノガイはジョチ・ウルスの第16代君主サシ・ノカイ、トゥグル・テムルは第17代君主トゥグルク・テムルとして現れる。

政治的な領域を超えた「知のネットワーク」（人や文献の移動など）は依然として存在していた<sup>27</sup>。知識人たちは、自身のアイデンティティを求めるチンギス家の人々からの要請もあり、この「知のネットワーク」を利用して歴史的な知識を集積し、それにもとづいて史書を編纂したのである。したがって、このような史書の形式や内容を比較・検討することは中央ユーラシア西部の歴史の再構築におおいに寄与するものと思われる。

---

<sup>27</sup> これについては、Ötāmiš Hāji, *Čingīz-nāma*, pp. xxiii–xxv も参照。